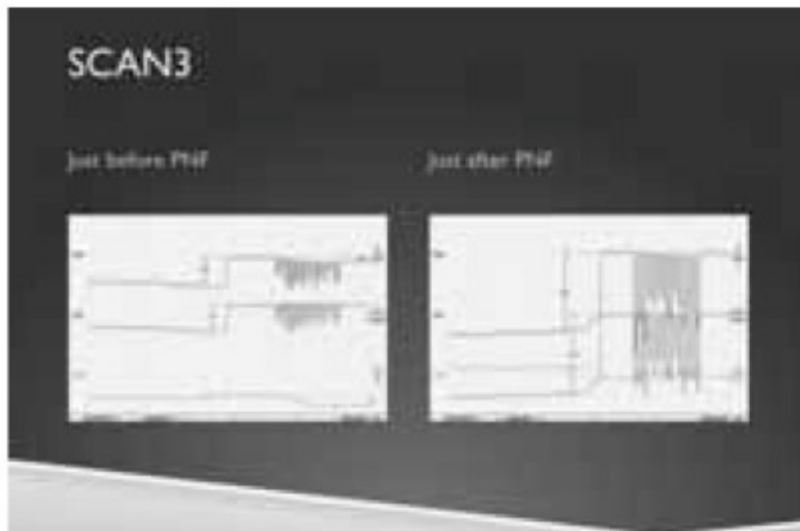


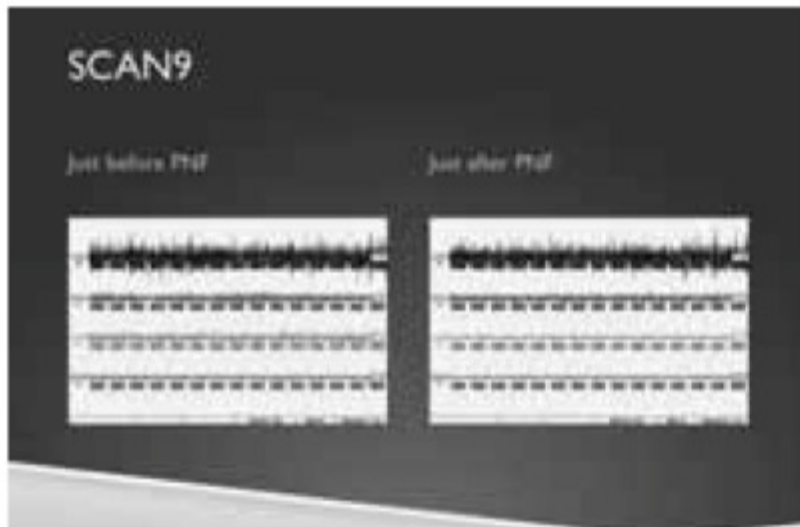
SCAN 3

安静空隙量の増加がみられる。



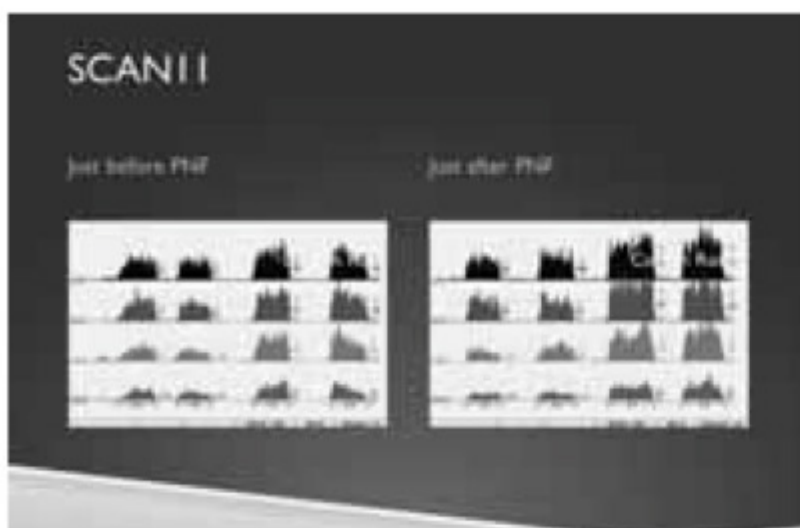
SCAN 9

やや、左側の咬筋と側頭筋の発火量が低下してる。



SCAN11

スキャン11の比較。特にコットンロール介在時での咬合力の増加が認められる。この患者は、Dual Biteで、それによると考えられる変形を認めるコンダイルへの圧迫が、コットンロールを介在することにより軽減されたものと思われ、さらに関節の牽引および圧迫の促通がより咬合



力のパフォーマンス増大につながったものと考ええる。

SCAN13

最後にスキャン13です。特に左右側方運動量の増加が認められる。



総括

顎機能改善の治療において、各診療毎に、僅か3分程度で手技が可能なPNF(経筋促通法)は、MI(Minimal Intervention)の概念に基づいた症状の自然消退(Self Limiting)の期待から、また薬物(抗不安薬、筋弛緩薬など)の多様化防止の観点から、更に根本治療である、より機能的な「筋肉位」での咬合を確立するために大変有用であることが示唆された。

参考文献

- ①Voss DE, Inota MK, Myers BJ (福屋靖子ほか訳)：神経筋促通手技-パターンとテクニック-、第3版、協同医書出版社、東京、1989
- ②Kabat H：Studies on neuromuscular dysfunction.. The role of central facilitation in restoration of motor function in paralysis. Arch Phys Med 33:521-533,1952
- ③中島榮一郎他：PNFを歯科領域で導入するにあたってデンタルエステティックパートⅣ、224-231,1994.
- ④Gellhorn E：The influence of